

Elementary Archaeological Report

てらこや理文

平成27年
春号

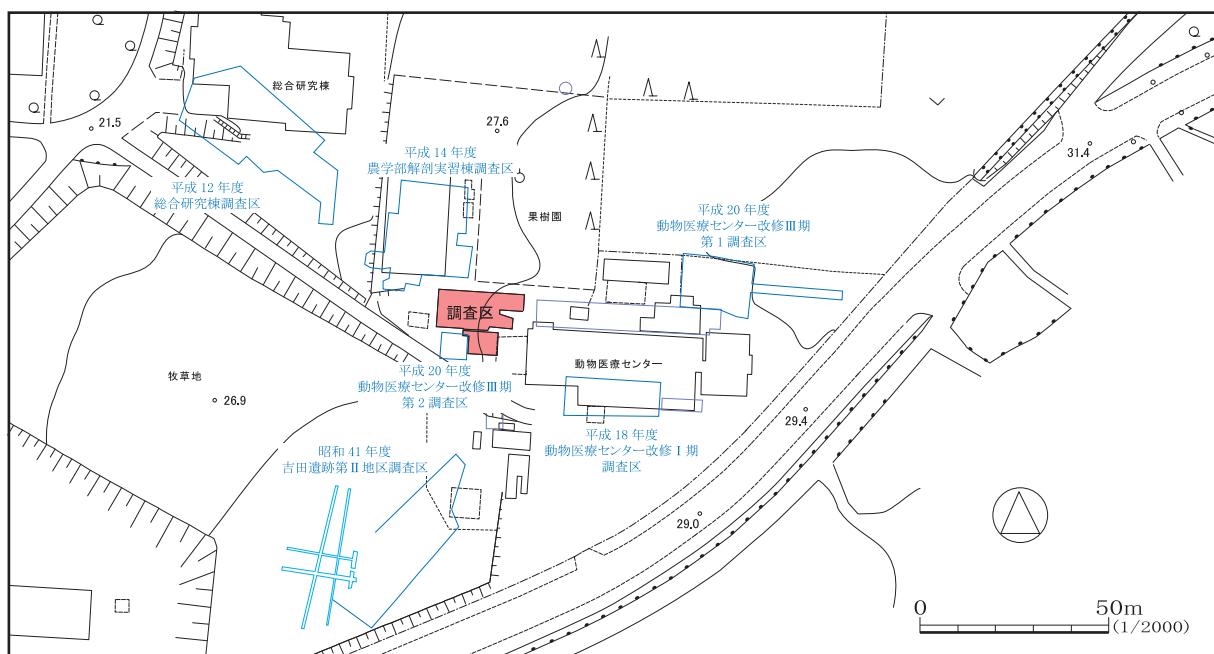
今年度も発掘しました！「山口大学構内遺跡」

本学の教職員や学生、そして地域の皆さまが当館を利用する場合は、博物館施設としての活動（資料展示や市民講座など）を活用される場合が多いかと思います。しかし、本学における当館の主幹業務は、なんと言っても「構内の埋蔵文化財保護」、具体的には「学内開発工事等に対する遺跡保護の観点からの事前調整および遺跡の発掘調査」を行うことにあります。

本学の主要5地区の構内（山口市：吉田地区・白石地区、宇部市：小串地区・常盤地区、光市：光地区）は、いずれも「周知の埋蔵文化財包蔵地＝遺跡」の上に立地します。当館は、昭和53年（1983）に助手1名が配置されて以降、毎年計画される本学の施設整備計画等に対して、埋蔵文化財保護業務を行ってきました。平成26年度は、助教3名、技術補佐員1名の体制で、本発掘調査1件と予備発掘調査1件、立会調査10件を実施しました。ここでは吉田構内で行った本発掘調査の概要をご報告します。

本発掘調査

(吉田遺跡) 動物医療センター（リニアック室等）新営その他工事に伴う本発掘調査



調査地区：吉田構内動物医療センター西側空閑地 調査期間：平成26年11月17日（月）～平成27年2月6日（金）
 調査面積：約300m² 調査担当：横山成己

調査前の状況を確認すると

今回の調査地は、吉田構内でも最も密に埋蔵文化財が分布する地区の一つ、構内東南端部の動物医療センター西横の敷地です。周辺の調査では、平成14年度、18年度年度および平成20年度に実施した調査において、構内南側山地から派生する谷筋が検出されており、平成14年度調査では並列する総柱掘立柱建物跡が、平成18年度調査では柱根が遺存する大型掘立柱建物跡が発見されています。また谷埋土からは「官」「井」「主」「安」などの文字が記された墨書き土器をはじめ、銅製蛇尾（だび：帯の端をとめる金具）、金属铸造関連遺物など、遺構と合わせ、古代官衙（かんが：役所のこと）存在が確実視される資料が確認されており、構内遺跡でも埋蔵文化財保護に最大限の注意が必要な地域と言えるのです。

この他、谷筋をはさんで北東側と南西側の丘陵地では、中世の集落跡（昭和41年度調査区・平成20年度第1調査区）が発見されており、官衙廃絶後も長らくこの地に人々が定住していたことが明らかとなっています。

今回の調査地は、古代の谷筋にあたります。ということは…官衙関連の遺物が多量に出土することが予測されますし、なにより大量の土を掘り下げなくてはなりません！ 調査成果は如何に。

まずは造成土をすばやく除去！のはずでしたが

平成26年11月17日から重機掘削を開始し、造成土（大学建設時の盛り土）をささっと除去する予定でしたが、今回の開発予定地には水道管、ガス管、雨水管、污水管、電気線、ケーブル線など既設の配管がどっさりと。これらを傷つけないように、重機と人力でソロリソロリと掘り進め、同月28日によく遺物包含層（いぶつほうがんそう：土器や石器などが含まれている層）上面に到達しました。

固い、固すぎるよ遺物包含層…

さてこの遺物包含層、丘陵の高い所である調査区北東端部以外は全面に堆積しています（写真①）。検出以降、遺物包含層を遺物に気を付けてながらひたすら掘削。

しかしこの層、厚み約60cmでかなりの締まり具合。含まれる遺物と土の状態から、中世（室町時代）の整地層と推定されます。そして面積から予想される遺物包含層の土量は120m³。現実逃避したくなる気持ちをぐっと抑えながら、毎日コツコツと掘り下げていきます（写真②）。

そして12月15日によく遺物包含層の除去を終え、遺構面を検出。埋没谷の範囲を確認。広い、広すぎるよ埋没谷…（写真③）。

掘るしかない、掘るしかないのだ諸君…

埋没谷に直交する既設管の掘削断面から、調査区内での埋没谷の最深部は約1mであることが判明。ここからはさらに遺物に神経を尖らせながらの掘削が続きます。体力戦はもちろん神経戦でもあります。毎日、朝夕のミーティングでその日の作業と進捗状況を確認。作業中にも緊迫した声が飛び交います。「ガチ！」「あ～あ、「誰？割ったの」「大丈夫、くっつければいいから」「急いでるけど、気をつけて」「ガチ！」「……。」

木製品が大量出土…

谷埋土は、掘削が進み底に近づくにつれて湿潤になります。ということは…出土しますよね、吉田遺跡お得意の木製品。この6年間、筆者が担当する調査は谷や河川ばかり。埋没後も地下水脈が通り続けるおかげで、木製品は腐らずその姿をとどめます。調査終了後、順番に保存処理を行っているのですが、現状で約300点が保存処理順番待ちで水漬け保存となっているところに、トドメとばかりに曲物、木錘、ほぞ・ほぞ穴のある部材、斎串状板製品などがドドンと約200点出土。現在、当館1年間に処理が行える木製品の数は予算的に約20～30点程度。これで筆者が定年まで（約20年）に処理を見届けることができる木製品が早くも確定したことになります。

…お断りしておきますが、木製品が嫌いなわけじゃないんです。本来失われるはずの姿をとどめている資料から、何を読み解くか。貴重な文化財であるとともに重要な考古学の研究素材です。しかし、丁寧に竹べらで形を出す作業中も、頭の中には「カネと置き場所」問題が駆け巡る。それも偽らざる発掘調査員の気持ちなのです。ニンゲンだもの。

なんとか調査は終了しました

悪戦苦闘を続け、迎えた1月23日。掘削作業をなんとか終え、同月27日までに諸所の記録作業を行い、2月6日に埋め戻しまでの全行程を終了しました。

今回の調査では、顕著な遺構は確認されませんでしたが、奈良時代から平安時代にかけての膨大な数の土器が出土し、中に「〇（判読不能）殿」「田」などの文字が書かれた墨書き土器が含まれることも明らかとなっています。その他、古代の資料では珍しいものとして、長さ約20cmの鉄釘も発見されています。

出土遺物の整理作業は始まったばかり。まだ正確な内容を把握できていませんが、さらに古代官衙に関連する貴重な資料が発見されるかも知れません。請うご期待です。

（横山成己）



①遺物包含層上面を検出（東から）
右下の白線から矢印方向に遺物包含層が残る
11月28日撮影



②気づかれぬよう現実逃避しながら遺物包含層を掘る筆者とその仲間たち（東から）
12月9日撮影



③谷埋土上面を検出（東から）
中央白線から矢印方向に埋没谷が残る
12月19日撮影



今回も景気よく出土した木製品（南から）
日本経済もこのぐらい景気良く…
1月16日撮影



今年度も盛りだくさん！「展示活動」

平成 26 年度の展示活動

①第 2 回山口大学所蔵学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』を共催にて開催

平成 25 年度末より、本学の全学委員会「山口大学所蔵学術資産継承検討委員会」主催、当館共催の事業成果展を開催しました。展示は前期・後期の 2 部構成で、前期展は山口商工会議所主催の「山口お宝展」への参加企画も兼ね平成 26 年 3 月 1 日（土）から 4 月 24 日（木）まで、後期展は 5 月 12 日（月）から 6 月 27 日（金）までの会期で開催されました。

当館は共催館として展示会場の管理を行うと同時に、前期展にて筈倉古墳（山口市秋穂所在）出土品を出展しました。

会期中、前期展では 634 名、後期展では 409 名もの方々に観覧いただき、関心の高さがうかがわれました。『宝山の一角』展は 2 度目の開催となります。やはり専門外の資料に関しては知識不足で、観覧者からの質問に適切に回答できないことも。皆さんには迷惑をおかけしました。

今後は資料の理解をより深化させる必要があることを痛感すると同時に、博物館施設での専門研究員（学芸員）の必要性を再認識しました。

②第 36 回企画展『情報求む！～収蔵庫に眠る由来不明の考古資料たち～』を開催

当館には、構内遺跡出土品のほか、山口県内の著名遺跡出土品が数多く収蔵されています。その多くは学術的には未公開となっているため、少しづつですが資料調査を行っており、継続的に公開しています。

その他にも、当館には貴重でありつつも対処に悩む資料が存在します。それは、「由来不明」の資料群。それらの大多数は、昭和 20 年代に本学名誉教授小野忠熙氏と本学教育学部光分校の教官、光分校地理学談話会学生などが採取もしくは寄贈を受けた資料と推定されますが、資料情報が極めてあいまいなものです。埋蔵文化財資料館設置後、学内各所にあったこれらの考古資料は当館に集約されましたが、有効活用が困難な状況でしたので、死蔵状態が続いてきました。

考古資料は、出土地点（遺跡）、出土状況が確実であることで、はじめて学術資料としての価値を持ちます。それらの情報が複数欠落すると、研究対象とはなりえず、ただの「参考資料」となってしまいます。

今回は、これまで公開することのなかったそれら「由来不明」の資料を展示すると同時に、会期中に本学ホームカミングデーが開催されることから本学の教職員 OB や卒業生、さらには地域の方々にも「資料に関する情報提供」を呼びかけることによって、少しでも展示資料の「資料的地位」を向上させることを目的としました。つまり、「見学者参加型」展示です。会期は平成 26 年 7 月 22 日から 10 月 19 日までの約 3 ヶ月に設定しました。

展示室では、実物資料とともに現在残されている情報を解説したパネルを置き、室内中央に見学者が自由に書き込める「情報提供ノート」を設置しました（写真右上）。また、当館初の取り組みですが、見学者が自宅等で資料の姿と情報を確認できるよう、当館 web 内にパネルデータのダウンロードコーナーを設けました（写真右）。

その結果、わずかですが下松市花岡八幡宮裏山出土須恵器などにに関する情報が寄せられ、一定の成果を得るに至りました。

今回の展示では、複数の新たな取り組みに挑戦したこと也有ってか、会期の大半が学休期間中であったにもかかわらず、429 名の見学者を迎えることができました。今後も特色ある企画展を行う所存です。



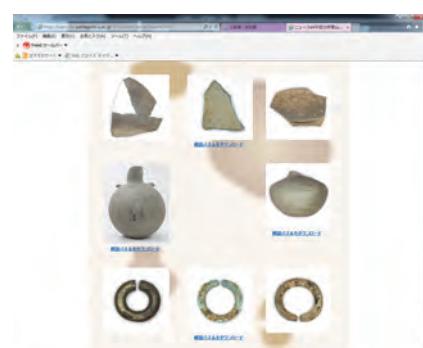
4月 5 日（土）開催前期ミュージアムの模様



第36回企画展の模様



展示室に設置した「情報提供ノート」



当館 web にて
資料解説/パネルを公開

③平成 26 年度 山口県大学 ML 連携特別展

『新発見資料から歴史を知る

～山口大学発掘調査速報展 2012-2013～』を開催

参加館が共通テーマに沿って各大学や館の特性を生かした学術資料または研究成果の展示を開催するという現行体制での山口県大学 ML(ミュージアム・ライブラリー)連携特別展は 2 年目に突入。

平成 26 年度は、新たに 2 大学 3 館(岩国短期大学附属図書館、東亜大学附属図書館、山口大学医学部図書館)が参加することとなり、11 大学 15 館での事業開催となりました。

今年度は、10 月から 1 月までの間に各館が最低 2 ヶ月の開催期間を設定し、「発見」を共通テーマに展示を開催することとなりました。当館は平成 26 年 11 月 3 日から平成 27 年 1 月 30 日までを会期とし、数年に一度開催している発掘調査速報展を実施することにしました。

展示対象とする調査は、平成 24 年度から翌 25 年度に吉田構内にて実施した発掘調査 3 件(①図書館改修工事及び環境整備工事に伴う本発掘調査(てらこや埋文 23 号所収)、獣医学国際教育研究センター新営工事に伴う本発掘調査・③第 1 武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査(てらこや埋文 24 号所収)です。

今年度山口県大学 ML 連携事業参加決定当初(平成 26 年春)は、展示開催まで十分に時間があり、それまでに出土品の整理作業や調査がある程度進行すると考えていたのですが、アマイ、アマイ。特に①調査の出土資料は膨大で、土器接合も終了しないままに展示開催となっていました。

そこで「未だ調査中であること」「今後遺跡や出土品の評価が変更される可能性があること」を解説パネルに明記した上で、③調査で出土し、保存処理を終えたばかりである弥生時代の竹製網代編み製品(写真右上)や、①③調査で出土したものの、未だ接合作業中である弥生時代から古墳時代にかけての土器や石器を中心に、展示を構成しました。

見学者の方からは、「調査中の臨場感があって面白い」「何も出土しないことも調査成果の一つであることが分かった」などの声が聞かれ、展示品ではなく、埋蔵文化財調査自体に興味を示す方が多かったことも本展の特徴でした。

この他、本学姫山祭(大学祭)開催日を展示オープン日としたことから、図書館 1 階にてオープン記念ワークショップ「網代編み体験」を開催しました。こちらは事前広報が不足したためか、約 10 名の参加者にとどまりましたが、みんな熱心に取り組んでいました。

来年度の山口県大学 ML 連携事業の共通テーマは「つなぐ」に決定。来年度は準備不足にならないよう、展示構成を立案中です。

④第 3 回山口大学所蔵学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』を共催にて開催中!

瞬く間に時は過ぎ、現在当館では第 3 回『宝山の一角』展を開催中です。

前期展は平成 27 年 2 月 28 日から 4 月 24 日、後期展は 5 月 7 日から 6 月 30 日までの開催です。当館は、前期展にて国史跡見島ジーコンボ古墳群第 151・154 号墳出土品を出展しています。

考古資料の他にも、日頃目にすることができない多分野の貴重学術資料が展示されています。誘い合わせの上、ぜひ 1 度足をお運びください。なお、4 月 4 日(土)14 時から前期展のミュージアムトークを、6 月 6 日(土)14 時から後期展のミュージアムトークを開催します。事前申し込み、参加費等不要です。資料とともに、専門外の資料解説に筆者が緊張しながら取り組む姿もお楽しみ下さい。
(横山成己)



展示の模様



保存処理を終えた弥生時代の
竹製網代編み製品



網代編み体験ワークショップの模様



山口お宝展参加企画も兼ねる
『宝山の一角』前期展



吉田キャンパスで古代米づくりに挑戦しました！ —第14回公開授業—

山口大学埋蔵文化財資料館では、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として平成13年度から公開授業を開催しており、今年度で14年目を迎えました。

今年度の公開授業は平成18年度から取り組んでいるテーマ、日本のお米のルーツとされる赤米を実際につくり、土器などで調理して食べてみるという内容です。授業は山口大学農学部附属農場と共に延べ3回行い、小学生6名、教育学部学生7名、一般10名、合計23名の皆様に参加していただきました。赤米の品種は昨年と同じ「紅吉兆」という品種（もち米）です。

6月14日－田植え－

参加者は農学部附属農場・技術専門職員の長砂さんに代かきをしていただいた水田に、田植え網を目印に田植えをしました。田植えがはじめての参加者も多く、水田がぬかるみ転びそうになるなど移動が大変でしたが、協力して無事に終了することができました。

7月13日（土）－稲の観察と除草・土器づくり－

参加者は技術専門職員の長砂さんから水田に生える雑草（コナギ）についての説明を受けて稲とヒエの違いなどを学習し、水田で観察をしました。その後、実習室に戻って土器づくりに挑戦しました。短時間でしたが、参加者それぞれが古代をイメージした個性的な土器ができました。

－収穫と土器焼成－

台風18号の接近により第3回の公開授業はやむなく中止となりました。このため収穫は10月6日に農学部附属農場が行い、土器焼成は10月11～12日にかけて埋蔵文化財資料館が行いました。土器の大半は割れることなく焼成することができました。

11月15日（土）－脱穀・糲すり、赤米を食べる－

当日は朝から快晴に恵まれました。午前中は箸こぎ、臼と杵による脱穀・糲すり、てみとザルによる選別と千歯こきによる作業を体験しました。午後からはいよいよ赤米の試食です。今回も土器による炊飯と蒸米、あさりのすまし汁づくりに挑戦しました。炊飯は成功しましたが、一昨年・昨年同様火力不足のためか時間内にお米を蒸すことはできませんでした。あさりのすまし汁の味付けは女性参加者が行い、藻塩ベースのあっさりした味に仕上げることができました。炊飯した赤米はほんのりとした甘みがありました。他にもおかずには朴葉焼き、豚汁をつくりましたが、これらも美味しく好評でした。このほか、小学生の参加者を中心に様々な道具による火おこしにも挑戦し、多くの方が点火に成功しました。

公開授業を終えて

今回の公開授業は、古代米づくりをはじめて9年目となります。過去8年間を含め、はじめて参加者に収穫と土器焼成をしていただくことができませんでしたが、無事に終了することができました。

参加者からは「楽しかった。古代人は大変（小学生）」、「赤米は思ったよりも硬くなくておいしかった（学生）」、「古代人の知恵はすばらしい（一般）」などの声が寄せられ、好評でした。

埋蔵文化財資料館は来年度も古代米づくりに挑戦します。どうぞご期待ください！

（田畠直彦）



田植え



脱穀・糲すり



土器づくり



参加者の皆さん



長崎県対馬市採集の大型石斧

金属の道具を持たなかった縄文時代の人々は、石で様々な道具を作っていました。今回紹介する石斧もそうした道具の一つですが、長さ 25.1cm、重量 1,021.7g と大型であるという点が注目されます。本資料の収蔵の経緯ははっきりしませんが、1940 年に採集されたもののようにです。採集地は長崎県対馬市厳原町士富とされます。対馬市遺跡地図によると、士富集落の近くに縄文～古墳時代の下原遺跡があります。本資料はおそらく下原遺跡から出土したもので、士富集落に持ち込まれたのでしょうか。このように、資料館には先生方・学生さんが文化財の保護を目的として採集した遺物が数多く収蔵されています。この石斧は収蔵庫で長く保管されてきましたが、今年度の展示（『情報求む！～収蔵庫に眠る由来不明の考古資料たち～』）で初めて公開されました。ご覧になった方もいらっしゃることでしょう。

対馬には縄文時代の遺跡が多数分布していますが、そのほとんどは海岸部に位置しています。山がちで平野部が少ないという地理的要因もあるのでしょうか。下原遺跡は大多数の縄文時代の遺跡と異なり、海岸から 5 km ほど内陸にはいった小さな谷底平野に位置しています。内陸で石斧が出土することにはどのような意味があるのでしょうか。

対馬の縄文時代の遺跡はほとんどが小規模で、短期間営まれたものばかりです。しかし、縄文時代後期（約 4,500 ~ 3,300 年前）になるとやや定住的な集落があらわれます。佐賀貝塚はそうした集落のひとつと考えられますが、注目されるのは大量に製作された石斧です。佐賀貝塚では小型から大型のものまで、未完成品も含めて 312 点が見つかっています。このうち、大型の石斧に今回報告する資料が類似しています。石器の材料が得られる場所は限定されていますので、おそらく佐賀貝塚で製作され下原遺跡まで運ばれたものなのでしょう。佐賀貝塚の同じタイプの石斧は平均 15.4cm, 431.5g ですから、これと比較すると本資料がいかに大型かということがわかります。基本的に打製石斧は土掘り具、磨製石斧は伐採用・加工用と考えられています。やや大きすぎる気もありますが、本資料も土掘りに使われたのでしょうか。

縄文時代で土を掘る作業といえば、竪穴住居や貯蔵用の穴がまず考えられます。対馬の小さな平野部にも人が住むようになり、土掘りの道具が必要になったのかもしれません。道具といっても、かなり立派な石斧です。一体、どのようにこの石斧を手に入れたのでしょうか？そして、どのような人々だったのでしょうか？本資料は採集品ですので、発掘で出土した遺物と比べると情報量はかなり少ないことは確かです。それでも、様々な情報を組み合わせることによって、過去を復元する手がかりとなります。皆さんも遺物を眺めながら昔の人の暮らしに思いを馳せてみませんか？

(川島尚宗)

対馬の縄文時代遺跡
(古澤2014図より作成)

対馬市厳原町士富採集の石斧



内業のお仕事紹介 Vol.4

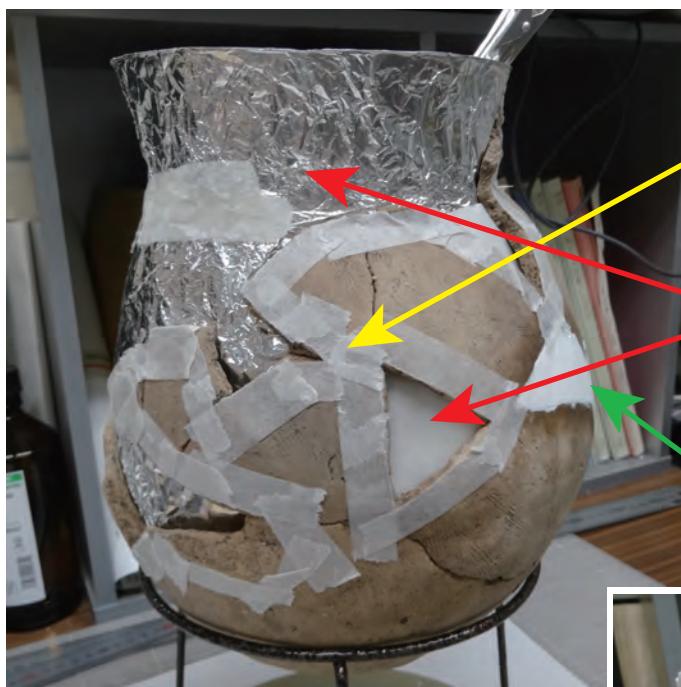
土器の接合・復元

皆さんはこれまでに学校の教科書や、資料館・博物館などで、きれいに復元された土器を何度かご覧になった事があるかと思います。当館でも様々な展示活動を行っていますが、そこでよく耳にするのが「どうやってバラバラの破片をくっけるのか」「どうやって元の形にするのか」というご質問です。

このコーナーでは皆さんの疑問にお答えするべく、土器の接合から復元までの過程をお見せします。



最終章かな？ 土器の復元 接合した壺の補強・復元をする



●土器に石膏がつかないよう、弱粘着のマスキングテープを貼ります。今回の土器の表面はもろいので、テープの粘着力で傷めないように注意します。

●アルミホイルやテープ類などを使い、形がよく残っている部分を利用して型をとります。身近な道具で、石膏入れの型をつくることが出来ます。

●上記の方法で、壊れそうな部分は、先に石膏を入れて補強しておくと安心です。

●型に合わせて石膏を入れ、彫刻刀や肥後の守(※)などで石膏を削り、形を整えたら完成です。
(※復元道具については、てらこや埋文3号で紹介しております。そちらをご参照ください)

復元・補強は、特に決まった方法はありません。土器を傷めないようにするのが大前提なので、より効率良く作業を進めるための方法を、模索しています。

同じ割れ方をする土器は一つとしてないので、技術はもちろんですが、臨機応変にアイディアを出すことも大切だと思います。

おすすめの復元方法を常時募集中です！

(乃美友香)



平成 26 年度 埋蔵文化財資料館の活動

4月 3/1(土)～4/24日(木)

第2回山口大学学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』前期展開催 ※共催事業 入館者総数 634名

4/5(土)「山口大学と平川地区との春の交流会」展示団体見学

『宝山の一角』後期展ミュージアムトーク開催

5月 5/12(月)～6/27(金)

第2回山口大学学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』後期展開催 ※共催事業 入館者総数 409名

5/12(月)～6/5(木)

萩博物館所蔵見島ジーコンボ古墳群第128号墳出土資料調査

5/15(木) 山口県博物館協会総会出席



山口大学と平川地区の春の交流会団体見学の模様

6月 6/7(土)『宝山の一角』後期展ミュージアムトーク開催

6/14(土) 第14回公開授業

『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう9－』

第1回授業(田植え・藁ない)開催 参加者 20名

6/19(木)～20(金)

第17回大学博物館等協議会・第9回博物科学会にて研究発表

6/20(金) キャンパスでくつツアによる展示団体見学



『宝山の一角』後期展ミュージアムトークの模様

7月 7/9(水) 理学部学生(10名)博物館実習受け入れ

7/13(土) 第14回公開授業

『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう9－』

第2回授業(稻の観察・土器づくり)開催 参加者 16名

7/22(火)～10/19(日)

第36回企画展『情報求む！～収蔵庫に眠る由来不明の考古資料たち～』

開催 入館者総数 429名



小串構内予備発掘調査風景

8月 8/28(木) 山口県市町埋蔵文化財連絡協議会役員会出席

9月 9/5(金)～10月7日(火)

小串構内基幹・環境整備及び診療棟・病棟新営工事に伴う予備掘調査を実施

9/5(金) キャンパスでくつツアによる展示団体見学

9/30(火) 山口県市町埋蔵文化財連絡協議会出席



JAPAN 歴食サミット・プレ大会での出張展示

10月 10/4(土) ホームカミングデーのため臨時開館

10/11(土)～12(日)

10月5日開催予定公開授業が中止となったため、資料館員が土器を焼成



第3回『宝山の一角』前期展 当館出展の模様

11月 11/3(日)～1/30(金)

山口県大学ML連携特別展参加企画『新発見資料から歴史を知る

～山口大学発掘調査速報展 2012-2013～』開催 入館者総数 345名

11/3(日) 総合図書館にてワークショップ「網代編み体験」を開催 参加者 10名

11/8(金) キャンパスでくつツア特別版による展示団体見学

11/14(木) 山口県博物館協会研修会参加

11/16(日) 第14回公開授業

『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう9－』

第3回授業(脱穀・赤米の試食)開催 参加者 19名

11/17(月)～2月6日(金)

吉田構内動物医療センター(リニアック室等)新営工事に伴う本掘調査を実施

12月 12/21(日) 本学サークル「トムソーヤー(ズ)」による福川小学校小学生展示団体見学

1月

2月 2/28(土)『JAPAN 歴食サミット・プレ大会』(於：山口市ニューメディアプラザ)

にて出張展示「弥生の米づくり」を実施

2/28(土)～4/24日(金)

第3回山口大学学術資産継承事業成果展

『宝山の一角』前期展開催 ※共催事業

3月 3/31(火)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』刊行

『見島ジーコンボ古墳群 第128・137号墳出土資料調査報告書』刊行

『山口県大学ML連携事業報告 平成26年度展示テーマ「発見」』刊行

『山口大学埋蔵文化財資料館通信第25号 てらこや埋文2015春号』刊行

編集・発行

山口大学埋蔵文化財資料館

〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1

【Tel/Fax】083-933-5035

【E-mail】yuam@yamaguchi-u.ac.jp

【HP】<http://yuam.oai.yamaguchi-u.ac.jp>

発行年月日 2015.3.31.

山口大学埋蔵文化財資料館通信

第25号

『てらこや埋文』2015春号